

(49) 男が女の肩を だく

これは並んだ男がそのまま女の肩に手をまわした状態をさすが、これは、密着した接触をあらわす「だく」が親愛の情を余剰的に含むようになり、このような表現をうんだと考えられる。手を対象にまわすという動作を「だく」というわけではない。この類の例はこれだけで、たとえば、「胸をだく」とか「腰をだく」のような表現はない。ここでは慣用的表現として別に扱う。

<注6> この例に「かかえる」を使用できない人もいる。それらの人々にとって「かかえる」は〔支え持つ〕特徴を持っている。

言語経歴：1955年3月徳島県名西郡石井町生
0～18歳徳島県名西郡石井町 18
歳～23歳高知市 23歳～26歳東京
都品川区 26歳～横浜市

さがす・さぐる

沼田善子

1. はじめに

ここにあげる「さがす」と「さぐる」の二語は、どちらも何らかの目的をもった意志動詞である。国研1964では、この二語を「2.306₂探求」に分類している。また柴田編1976では、この二語とさらに「あさる」を含めた三動詞について「何かを発見しようとして努力する」(p. 29)という共通点を指摘している。しかし、共通点を持ちながらも、これらの語は、具体的な用法の上で、言い換えのできない場合があり、互いに意味の上で重ならない部分を持つ。そこで、「さがす」と「さぐる」の二語について、両者の意味の差異を考えてみたい。

2. 分析

2.1. 構文

「さがす」「さぐる」は共通して、基本的には以下の構文をとる。

- (1) NP₁ガ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (2) NP₁ガ NP₃ヲ さがす/さぐる。
- (3) NP₁ガ NP₃デ/ニ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (4) NP₁ガ NP₄デ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (5) NP₁ガ NP₄デ NP₃ヲ さがす/さぐる。

NP₁は、「さがす」「さぐる」両動作の動作主体を示す。NP₂は、対象物を示す。NP₃は動作の行われる場所を示し、NP₄は手段あるいは道具を示す。以下に各々の構文について、具体例を示す。

- (6) 太郎が マッチを さがす/さぐる。
- (7) 太郎が 暗室を さがす/さぐる。
- (8) 太郎が 暗室で/に マッチを さがす/さ

ぐる。

(9) 太郎が 手で マッチを さがす/さぐる。

(10) 太郎が 手で 暗室を さがす/さぐる。

なお、NP₃が格助詞「に」を伴う形は文語的であり、稀である。(8)は「暗室に」という形では、若干なじみにくい、次の様な例がある。

(11) 花子が 駅の人込みに 母を さがす。

(12) 花子が その記事の中に 真相を さぐる。

以上、「さがす」「さぐる」がとる基本的構文をあげた。

ところで、両語は、この他に、ト格やカラ格名詞句を伴う構文をもとり得る。しかし、カラ格やト格については、両語の間に示差的特徴を見い出せないため、本稿では考察を省く。ただし、いわゆる起点としての場所を示すカラ格名詞句は、テンスと関係して、両語の意味に興味深い影響を与える。従って、これについては、「2.5. さがす・さぐるの意味に影響を与えるもの」の項で考察を加える。

さて、以下では、先の基本的構文におけるカ格、ヲ格、デ格にたつ、動作主体、対象、手段(道具)、場所を示すものについて、順に考察を行う。

2.2. 動作主体

「さがす」「さぐる」の動作主体は、人間、動物等の有生名詞句か、または、人間の集まった団体や機関を示す名詞句である。これは、両語が、目的意識の行為を示す意志動詞のためである。

ただし、動作主体を示すカ格名詞句の位置に、ロボット、ヘリコプター等の機械や、手足、目といった人間の身体部位である無生名詞句がくることがある。

(13) ロボットが ボールを さがす。

- (14) ヘリコプターが 海の汚染状況を さぐる。
 (15) 太郎の目が アルバムに 母の思い出を さがす。
 (16) 太郎の手が ポケットの手帳を さぐる。

のような場合である。上例の各格名詞句は、人間により操作される、動作のための道具、手段を示すものとも考えられる。しかし、これらは、いずれも擬人化のような特殊な表現と考えられる。(13)はロボットを、(15)(16)は太郎の目や手を擬人化した表現と考えられる。(14)もヘリコプターの乗員で、「さぐる」動作を行っている人間を、ヘリコプターで代表させている。これも一種の擬人化と考えることができる。

従って、「さぐる」「さがす」の各格名詞句は、動作主体を示し、原則的には有生名詞句であると考えられる。

ただ、「さぐる」については、動作主体について、「さがす」よりも制限が厳しい可能性を示す内省報告があった。

- (17) 小犬が ボールを さがす。
 (18(?) 小犬が 犬小屋の中を さぐる。

上例で、(18)について、「小犬」を擬人化した表現と解釈しなければ、不自然さを感じないのである。筆者は、(18)にとりたてて不自然さを感じないが、あるいは内省によって、「さぐる」の動作主体は「さがす」よりも制限が厳しく、人間や人間に準ずる団体や機関しか認められないかもしれない。

2.3. 対象

対象については、「さがす」「さぐる」の間で、対象の何を求めるかに違いが見られる。対象の具体、抽象にかかわらず、「さがす」は常に、その存在位置を求めるが、「さぐる」は、存在位置を求める場合と、外形や内容を求める場合があるのである。

「さぐる」は、対象が具体物の場合、動作の目的として、対象の存在位置を発見しようとする場合と、対象の外形を明らかにしようとする場合がある。抽象物の場合は、動作の目的は、常に対象の内容の解明である。

対象における、両語のこのような違いは、すでに柴田編1976でも、対象が抽象物の場合については、指摘されている。以下に、対象が抽象物の場合の、両者の例をあげる。

- (19) 新規採用で 優秀な人材を さがす。
 (20) *新規採用で 優秀な人材を さぐる。
 (21) 職を求めて 就職口を さがす。
 (22) *職を求めて 就職口を さぐる。

- (23) *彼の真意を さがす。
 (24) 彼の真意を さぐる。
 (25) *真相を さがす。
 (26) 真相を さぐる。

上記の例のうち、(19)(20)(21)(22)は、対象の存在位置が求められるため、「さがす」は使え、「さぐる」は使えない。逆に、(23)(24)(25)(26)は、対象の内容が求められるため、「さがす」が使えず、「さぐる」が使える。

対象が具体物の場合にも、以下の例から、両者の、先の違いを知ることができる。

- (27) ポケットの中の 10円玉を さがした。
 (28) ポケットの中の 10円玉を さぐった。
 (29) *ゲームで 問題物をさがして 形をあてる。
 (30) ゲームで 問題物をさぐって 形をあてる。
 (27)(28)は、対象の存在位置を求めるため、「さがす」も「さぐる」も使える。ところが、(29)(30)は、対象の外形がどのようなものであるかを求めるため、「さぐる」は使えるが、「さがす」は使えない。

さて、上記のような違いをふまえた上で、対象を具体物と抽象物の場合に分け、両語の間に、さらにどのような特徴がみられるか、以下考察を行う。

まず、具体物について考えてみたい。対象が具体物の場合、両語を比較すると、「さがす」については特に制限が無いのに対して、「さぐる」には以下のような制限がある。

第一に、柴田編1976でも指摘されることであるが、「さぐる」は目に見えるものを対象とすることができない。以下、その例をあげて示す。なお、この制限は、対象の存在位置が求められる場合でも、外形の解明が求められる場合でも、同様である。

- (31) 絵の中の まちがい を さがす。
 (32) *絵の中の まちがい を さぐる。
 (33) 暗闇で 電気のスイッチを さがす。
 (34) 暗闇で 電気のスイッチを さぐる。

「絵の中のまちがい」は目に見えるため、(32)は「さぐる」が使えない。しかし、「暗闇」の中の「スイッチ」は目に見えないため、(34)は「さぐる」が使える。この場合、「さがす」については、(31)(33)いずれも使え、問題はない。以上は、対象の存在位置が問題となる場合であったが、外形が問題となる場合も同様で、(35)は「さぐる」を使えない。

- (35) *太郎の顔を見ながら、その顔を さぐる。
 また、「さぐる」の対象は不可視であるだけではない。次のような例がある。
 (36) カセットテープ中の 沢山の音から エンジ

ン音を さがす。

(37) *カセットテープ中の 沢山の音から エンジン音を さぐる。

(38) 五種類の花の香から バラの香を さがす。

(39) *五種類の花の香から バラの香を さぐる。

(40) きき酒をして 当地の地酒を さがす。

(41) *きき酒をして 当地の地酒を さぐる。

(35)から(41)の例文は、いずれも対象の存在位置を問題にし、その対象は、聴覚、嗅覚、味覚等を使う必要があり、手や足で触れられる形をなさない物である。この場合、「さがす」はすべて問題ないが、「さぐる」は使えない。対象の外形が問題になる場合も、もとよりその外形を求められるのであるから、上述のような対象物に対して「さぐる」は使えない。従って、「さぐる」対象は、手足等の触覚によりとらえられる物と考えることができる。

しかし、次のような例は「さぐる」も使える。

(42) ガイガーカウンターが 放射能の汚染箇所を さぐる。

ただ、このような例は、ガイガーカウンターなどの機械を使う、特殊な場合であり、通常はやはり「さぐる」について上記の制限があてはまる。

さらに、上記の制限の他、「さぐる」の対象には、無生物であるという制限もある。以下に例を示す。

(43) 太郎の手を さがす。

(44) 太郎の手を さぐる。

(45) 太郎を さがす。

(46) 太郎を さぐる。

(47) 盲人が 犬を さがす。

(48) ?盲人が 犬を さぐる。

上記の例の中、(43)(44)は、太郎の体の一部ということで、「太郎の手」自体は無生物としてとらえられるため、「さぐる」も「さがす」同様使える。この場合の「太郎の手」は、存在位置を求められるものであっても、また、その外形を明らかにするためのものであってもかまわない。

(45)(46)は「さがす」「さぐる」ともに使えるが、その意味が違っている。つまり、(45)は「太郎」を具体的な一人の人間として、その存在位置を求める対象と、とらえている。ところが(46)の「太郎」は、その人物の内容を明らかにする抽象的対象か、または、ある対象を「さぐる」ために、言動や表情をチェックされる抽象的場所と、とらえられる。存在位置や外形を求める対象としてなら、(46)の「太郎」に対して「さぐる」は使えない。(47)(48)も(45)(46)とほぼ同様に扱えるが、ただし、(48)の

「犬」を外形を求める対象か、その体に触れて、傷口の存在位置でも「さぐる」場合の具体的場所としてなら、使えないこともない。しかし、この場合も「犬の体」というように無生物化してとらえられるのがふつうであり、(48)のような例は、不自然さが残る。

従って、やはり、「さぐる」については、対象の存在位置を求める場合でも、外形を求める場合でも、対象は無生物という制限を、原則として認めた方がよさそうである。

なお、この他に、柴田編1976では、「さがす」と「あさる」を比較し、次のような例をあげ、^(注1)「あさる」対象が<不特定>であるのに対し、「さがす」対象は<特定>であるとする。

(49) きのうち会った女を さがす。

(50) *きのうち会った女を あさる。

(51) *手当たり次第に女を さがす。

(52) 手当たり次第に女を あさる。

確かに、(51)の例はおかしい。しかし、これは「女をあさる」という状況が特殊なためであり、この例から「さがす」の対象を<特定>とするのは、疑問である。次の例を見よう。

(53) 適当な大きさの石を さがす。

この場合、石は、「さがす」主体があらかじめ、どの石と特定しているのではなく、「適当な大きさ」という規準にあえば、どの石でもよい。従って、「さがす」について対象が<特定>されているという記述は、必ずしも妥当ではない。同様のことが、「さぐる」についてもいえる。袋の中に手を入れて、適当な石を沢山とり出す場合など、

(54) 次から次と 適当な大きさの石を どんどん さぐる。

は、別に不自然な文ではない。

また、柴田編1976では、対象の数量についても、「あさる」との比較で、「あさる」対象の数量が不特定であることを示すため、次のような例を^(注2)あげる。

(55) 手にはいるかぎり さがした。

(56) 手にはいるかぎり さぐった。

(57) 手にはいるかぎり あさった。

柴田編1976では、(55)(56)に×印がついているが、筆者には、言えない文ではないし、次の例は自然である。

(58) 森で できるだけ沢山 木の実を さがす。

(59) 溝に落としたビー玉を できるだけ沢山 さぐる。

従って、「あさる」対象の数量はともかく、「さがす」「さぐる」について対象の数量には、必ずしも制限は

見られない。

さて次に、対象が抽象物である場合を考えたい。抽象的对象について、「さがす」がその存在位置を求め、「さぐる」がその内容を求めたのは、先述の通りである。しかし、「さがす」「さぐる」の対象で問題となるのは、それだけではなさそうである。

(60) *時を さがす。

(61) *時を さぐる。

(62) 彼の暇な時を さがす。

(63) 彼の暇な時を さぐる。

上の例の場合、非常に抽象度の高い「時」だけでは、「さがす」も「さぐる」も使えない。しかし、対象を特定の時として、「彼の暇な時」のように具体化すると、どちらも使える。それで、「さがす」「さぐる」の対象はその抽象性の度合いも問題となり、非常に抽象度の高いものは、両語とも対象にできないということが考えられる。ただ、しかし、名詞の抽象性を計る規準を設定することは、非常に困難で、何が両語の対象になり得、何がなり得ないかを明示することは、今のところできない。さらに検討を要する。

以上、「さがす」「さぐる」の対象について考察を行った。まとめると次のようになる。

- ・対象が具体物の場合、「さがす」は特に制限がなく、「さぐる」対象は、不可視で、通常手や足で触れられる形を持つ無生物に原則として限られる。
- ・対象が抽象物の場合、「さがす」「さぐる」ともに、極度に抽象度の高いものは、対象としてとり難い。
- ・「さがす」対象は、具体、抽象にかかわらず、その存在位置を求められる。
- ・「さぐる」対象は、具体物の場合、その存在位置から外形の解明が求められ、抽象物の場合は、その内容の解明が求められる。

2.4. 手段・道具

「さがす」については、「さがす」手段、道具に別段制限はない。ところが、「さぐる」については、その対象が不可視であったり、その内容であったりする、いわば潜在的なものであることから、それに伴い、いくつかの制限、特徴が見られる。

まず、対象が具体物の場合、「さぐる」対象は不可視であるため、目を使えない。また、「2.3.対象」で述べたように、聴覚、嗅覚、味覚等を使うこともできない。従って、「さぐる」動作は、手や足などの触覚を使うことになる。対象が存在すると思われる範囲の端点に、手や足などを触れ、その範囲を順にたどって

いって、目指す対象に触れることで、対象の存在位置を明らかにしようとする。または、対象そのものに触れて、対象の形に添ってたどり、その外形全体を明らかにしようとする。このようなものが、「さぐる」動作ということになる。そして、前者の場合「さぐる」過程で、対象物が存在すると思われる範囲内を、丹念に手で触れるなどしてチェックしていくことで、同時に、対象を発見するまでにたどった範囲内の様子も、ともに明らかにすることになるのである。

例えば(34)の例で考えてみる。(34)では「さぐる」対象は、「電気スイッチ」であり、「暗闇」の中で、その所在がわからない。そこで、スイッチがありそうに思われる壁などの一点に手や指先で触れ、目的のスイッチに触れるまで、壁をたどっていく。そして、同時に、スイッチに触れてその位置を発見するまでの、壁の様子も触れてたどっていくことで明らかになるのである。

抽象物の場合も、「さぐる」ものが、対象の内容という潜在的なものであるため、具体物の場合と通ずる特徴が見られる。つまり、一定の範囲内を、ある手がかりから、次の手がかりへと順に、その時点で顕在化している手がかりをたどることで、潜在的であった、範囲内の内部の様子を明らかにするのである。この時、内部の様子を明らかにされた一定の範囲あるいは、範囲の一部が、すなわち「さぐる」対象なのである。

これを(24)の例で考えてみよう。「さぐる」の対象は、ここでは「彼の真意」である。彼の真意がどのようなものであるか、その内容を明らかにしようとするのである。しかし、「彼の真意」とは、彼という人間の中に潜在的に備わるもので、彼以外の人間が彼を外側から見て知ることはできない。そのため、他人にもわかる、顕在化した要素である彼の表情や言葉、行為を手がかりとすることになる。それらの手がかりを丹念にチェックしながら、次から次へとたどることによって、彼の心の中を次第に明らかにする。そしてその一部である「彼の真意」を明らかにするのである。

以上、手段（道具）について特徴の見られる「さぐる」について考察を行った。まとめると以下のようになる。

・「さぐる」手段は、対象が具体物である場合、手や足などの触覚のみを使い、対象が存在すると思われる範囲、または対象そのものを、触れてたどっていくことである。また、対象が抽象物である場合、顕在化している手がかりを順にたどっていくことで、潜在的な対象を次第に顕在化させていくことである。

なお、本項のはじめにも述べたが、「さがす」については、このような制限、特徴は見られない。

2.5. 場所・範囲

「さがす」「さぐる」両動作を行う場所、範囲は、対象の具体、抽象に即して、具体的場所、抽象的場所があり、これらに特別な制限は見られない。

柴田編1976では、「さぐる」について、対象が具体物の場合、「対象物の存在範囲は見当は付いているが、かなり漠然としており、かつ比較的狭い」(p.32)という記述がある。しかし、次のような例はどうか。

(64) 男はポケットを探ると、名刺をとり出した。この場合、「さぐる」範囲は、「ポケット」という、はっきりした範囲に限定されている。また、次のような例ではどうであろうか。

(65) 落としたさいふを 田んぼ中 さぐる。
この場合も、「さぐる」範囲は「田んぼ」に限定されており、さらに、「田んぼ中」という広い範囲である。このことから、柴田編1976の記述は、必ずしも妥当でないように思われる。ただ、「さぐる」範囲の広さについては、比較的狭いというような傾向が見られなくもない。しかし、これは、「さぐる」動作が手や足の触覚を使い、一定の範囲をいちいち触れていかなければならないという特徴から、間接的に導かれる、あくまで傾向である。「さぐる」の意味自体について、その動作を行う範囲に、このような制限があるのではない。

以上、「さがす」と「さぐる」について、その意味の違いを、動作の主体、対象、手段、範囲等に見られる特徴から考察してきた。

ところで、「さがす」「さぐる」については、両語の意味に興味深い影響を与える若干の要素がある。そこで、「さがす」「さぐる」の意味をまとめる前に、そうした要素について考察を加えてみたい。

2.6. 「さがす」「さぐる」の意味に影響を与えるもの

「さがす」「さぐる」は、何かを発見しようという目的意識による行為を表す意志動詞である。しかし、両語とも発見しようとする動作の過程のみを表すのであって、目的物の発見という結果については、直接関与しない。ところが、意志、希望、命令などの文末表現の中で使われたり、期間を示す副詞句、完了テンス、起点を示すカラ格等と共に起ることにより、発見という結果まで含意する場合がある。このうち、文末表現につ

いては、国研1972ですでに指摘されている。

国研1972では、「さがす」について、その究極の目的が「みつける」や「発見する」と同じために、希望、意志などの形をとる場合は、結果を表す動詞と同じようなことになるとする。そして次のような例をあげる。

- (66) 夕方ランプを捜そうとして方方でマッチを擦ったことや、
(67) みんなのために、ほんたうのほんたうの幸福をさがすぞ。
(68) 私もおしる粉と一緒に食べる人をさがしたいものだ。

上記の例の「さがす」は、どれも「見つける」など「発見」を表す動詞とおきかえられる。これは「さぐる」についても同様である。以下にその例のみ示す。

- (69) 秘密を さぐろうとして 部屋に 忍び込んだ。
(70) 必ず 事件の真相を さぐる。
(71) 彼の本当の気持ちが さぐりたい。

次に期間を示す副詞句と共に起する場合の例を示す。

- (72) 三日以内に 事故の原因を さがす。
(73) 三日以内に 事故の原因を さぐれ。

上例は、「三日以内」という副詞句があるために、「さがす」「さぐる」が「事故の原因」を発見するという結果まで含意することになっている。また次の例などは、完了テンスをとることにより、このことが、さらにはっきりわかる例である。

- (74) 五時間もかかって なくしたメモを さがした。
(75) 一ヶ月以上もかかって A社の内情を さぐった。

さらに、起点のカラ格と完了テンスとの共起によっても、両語の意味に上記と同様の変化がおこる。この場合も、「さがす」「さぐる」同様に考えることができるので、以下では「さがす」についてのみ考察を行う。

- (76) *機首の部分から 故障の原因を さがしたが 何も出てこなかった。
(77) 故障の原因を さがしたが 何も出てこなかった。
(78) ?機首の部分から 故障の原因を さがしても 何も出てこないだろう。
(79) 現在 機首の部分から 故障の原因を さがしているが まだ発見できない。

上例のうち、(78)の不自然さは、起点を示すカラ格との共起により、対象の何らかの移動が想定されるのであるが、その移動が、起点となった場所から見い出され

る、つまり発見ということになるのだろう。しかし、カラ格との共起によって、必ずしも「さがす」が発見の意を含意しているとは限らず、(79)はいえる。

ところが、(76)(77)を較べると、カラ格と完了テンスの共起によって、「さがす」に発見の意が含まれることが、明らかになる。(77)は、「さがす」が完了テンスをとっても、これだけでは発見の意が含意されないで、自然な文となる。それが、これにカラ格が共起すると、(76)のように言えなくなる。これは、カラ格と完了テンスの共起により、「さがす」に結果である「発見」の意が含意されるためである。

以上、「さがす」についてのみ考察を行ったが、同様なことが「さぐる」についても言える。

このように、「さがす」「さぐる」は、文末表現、副詞句、共起する格、完了テンス等の影響により、動作の目的である「発見」をも含意するようになる。しかし、これはあくまでも、上記のような種々の要素の影響によるものであり、両語の本来的な意味は、動作の経過のみを問題とし、結果については関与していない。

3. まとめ

「さがす」と「さぐる」の意味の違いについての考

察を以下にまとめる。

さがす：求める対象の存在位置を発見しようとして行動すること。

さぐる：不可視で、通常手や足で触れられる形を持った無生物である対象の存在位置を発見しようとして、手や足などの触覚のみを使い、対象が存在すると思われる範囲を触れてたどっていくこと。または、不可視で、形を持った無生物である対象そのものに手や足で触れ、対象の形にそってそれをたどることで、全体の外形を明らかにしようとする。または、抽象的な対象に潜在的に備わる内容を、顕在化している手がかりを丹念にたどっていくことで、明らかにしようとする。

<注1> 柴田編1976, p. 34

<注2> 同, p. 30

<注3> 同, p. 31

<注4> 国研1972, p. 220

言語経歴：1958年1月 愛知県刈谷市生
0歳～23歳 愛知県知立市
23歳～ 東京都目黒区

はなれる・はずれる・とおざかる

杉本 武

1. はじめに

本稿で取り上げる動詞のうち「はなれる」と「とおざかる」は、国立国語研究所1964では、共に「2.156, 隔離」に分類されており、類義関係にあるとみられる。

(1) 車が 町から はなれる。

(2) 車が 町から とおざかる。

この一方、国広編1982でも述べられているように、「はなれる」は「はずれる」とも共通した点を持つ。

(3) 人工衛星が 軌道を はなれる。

(4) 人工衛星が 軌道を はずれる。

しかし、「はなれる」と「はずれる」とでは、置き換えのできない場合、できても意味の大きく異なる場合が多く、その類義関係は遠いとも考えられる^(注1)。また、「はずれる」と「とおざかる」は、さらに類義関係が遠いと考えられる。

本稿では、「はなれる」「はずれる」「とおざかる」の三語を分析するが、類義関係の点から、「はなれる」

に中心を置くことにする。

2. 統語的特徴

2.1. 構文

まず、「はなれる」がどのような構文で用いられるかをみてみよう。

(5) 部隊が 危険地帯から はなれる。

(6) 飛行機が 空港を はなれる。

(7) 太郎が 次郎と はなれる。^(注2)

(8) 太郎と次郎(と)が はなれる。^(注3)

上の例から、「はなれる」は、次のような構文で用いられることがわかる。

(i) はなれる / NP₁ガ $\left\{ \begin{array}{l} \text{NP}_2 \text{カラ} \\ \text{NP}_2 \text{ヲ} \\ \text{NP}_2 \text{ト} \end{array} \right\}$ _____

NP₁トNP₂(ト)ガ _____

次に、「はずれる」は、「はなれる」と同様に、カラ